

明日は我が身！備えあれば憂い（患い）なし？！ -令和7年度・冬道での転倒者を対象とした体験アンケート調査報告（速報）- You could be next! Be prepared! Stay safe! -Results of a Survey on Slip-and-Fall Experiences on Winter Roads-

富田 真未¹、金田 安弘¹、永田 泰浩¹、三原 夕佳¹
Mami Tomita¹, Yasuhiro Kaneda¹, Yasuhiro Nagata¹, Yuka Mihara¹
Corresponding author : tomita@decnet.or.jp (M.Tomita)

¹北海道開発技術センター

¹ Hokkaido Development Engineering Center

冬期歩行者の転倒実態をより詳細に把握することを目的に、令和7年度冬期の転倒者を対象にアンケート調査を実施した（回答数／233件）。転倒時に「ケガをした」人は約4割、そのうち「救急車を呼ばなかった人」は約9割で、過年度の調査結果とほぼ同様の傾向がみられた。本調査では新たに医療費や休暇取得の設問を追加した。ケガをして仕事等を「休んだ」人は約3割で、そのうち「1週間～1か月以上休んだ人」は約6割であった。治療等にかかった費用は、1万円以上が3割で、転倒による身体への負担（ケガ）とともに、休暇取得や医療費による経済的な損失が小さくないことがわかった。

1. はじめに

札幌市における冬道の歩行者転倒事故による救急搬送者数は、令和6年度冬期・令和7年度冬期の2年連続で過去最高を記録し、令和7年度には2000人を超えるなど、救急搬送される数は増加傾向にある。

著者らが所属するウインターライフ推進協議会（以下、協議会）では、冬道での歩行者転倒事故防止に向けた様々な普及啓発活動を行っており、その一つに、冬道転倒事故の特徴を調べ、滑りやすい場所や冬道の歩き方のコツをまとめたサイト『転ばないコツおしえます。』（図1）にて情報発信を行っている¹⁾。



図1 協議会の運営サイト『転ばないコツおしえます。』のトップ画面

関東などでの降雪時には、テレビや新聞等のメディアから、冬道転倒防止についての問合せも多く、協議会サイトの内容を参照した情報も発信されている。冬期の歩行者転倒事故は、北海道や東北・北陸などの積雪寒冷地のみならず、全国的な問題と言える。また、雪道の歩き方のコツや靴の選び方などを聞かれることも多く、滑る路面に対する知識や冬装備なども問合せを受ける中で、地域によって違いがあることがわかった。

高野ら（2015）²⁾による札幌市民を対象とした転倒事故の実態把握アンケート調査によると、救急搬送された人の約10倍以上の人がケガをしている可能性があるという報告されている。市民の10%以上がひと冬に冬道転倒でケガをし、約1%の人が入院している可能性があり、自動車事故と比較しても桁違いに大きな割合であると報告されている。

Hippi（2012）³⁾によると、北欧のフィンランドでは、冬道転倒事故による国の経済損失は、医療費、休業日数、福祉費を含めると、年間約24億ユーロ（※当時の為替レートで約24億円）と推定されており、交通事故の損失をはるかに上回るとされている。

冬道での歩行者転倒事故には、路面の滑りのほか、歩行者自身の身体能力や転倒防止への意識・備えも関係していると考えられる。また、転倒事故による費用負担などの実態を明らかにすることは、転倒事故をより自分事として捉えてもらう

上でも重要と考える。

2. 調査目的と概要

転倒事故を未然に防ぐための解決策を見出すためには、転倒者が実際にどんな状況で、どんな時に転んでいるのかなど、詳細な事故発生時の情報が欠かせない。このことから、転倒事故状況に関する Web によるアンケート調査を実施した。また、試行を含めて4回目となる令和7年度の調査では、ケガによるダメージ（費用や仕事などへの影響）も把握するため、ケガによる医療費や休暇の有無などについて設問を追加した。

【調査期間】令和8年1月21日～4月30日

【調査手法】Web アンケート（Google フォーム）

【回答条件】令和7年度冬期（令和7年11月～令和8年3月末まで）に冬道で転倒した方

【調査項目（設問）】

1. 属性（居住地、性別、年齢）
2. 転倒した場所
3. 転倒した場所の路面状況
4. 転倒してケガをしたか ⇒ケガをした体の場所、ケガの種類、 ケガの程度、転倒して救急車を呼んだか ⇒ケガによる休暇と日数、 ケガの治療にかかった医療費
5. 転倒した際の意識（滑ると思っていたか）
6. 転倒した際の行動
7. 転倒した際の歩き方 ⇒歩き方を意識していたか、 どのような歩き方をしていたか
8. 転倒した際の服装（身に着けていたもの）
9. 思い当たる転倒の原因

※下線は令和7年度に追加した新規設問

3. 調査結果と考察

アンケート回答数は、全233件であった。居住地では、「道内」が94%で220件、「道外」は6%で13件であった。性別では、「男性」が54%、「女性」は46%であった。年齢では、「50歳代」が最も多く、次いで「60歳代」「40歳代」であった。

3.1 転倒した場所

転倒した場所では、「歩道」が最も多く51%、「車道」は15%、「横断歩道」は14%であった（図2・左）。「駐車場や敷地」は12%、「建物や地下歩道などの出入口」は6%で、道路以外の場所でも

相当数の人が転倒していることがわかった。これまで協議会が転倒の注意箇所として発信してきた場所とほぼ同様の内容となり、それらを裏付ける結果となった。また、過年度の調査⁴⁾でも「歩道」は50%で、全体的にほぼ同じ傾向がみられた。

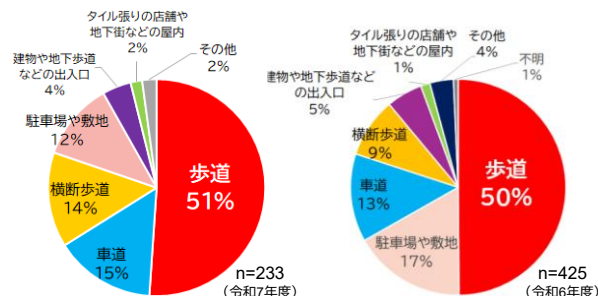


図2 転倒した場所（左：R7年度、右：R6年度）

3.2 転倒してケガをした人と救急車を呼んだ人の割合

転倒して「ケガをした人」は39%（令和6年度は35%）であり、転倒すると約4割の人は、なんらかのケガに繋がっている（図3・左）。また、転倒してケガをした人のうち、「救急車を呼んだ人」は8%（令和6年度は9%）であり、いずれも過年度の調査結果とほぼ同じ傾向が見られた（図3・右）。救急搬送者の約10倍がケガをしているという高野ら（2015）²⁾の報告を裏付ける結果となり、札幌市では約2万人が転倒している可能性がある。

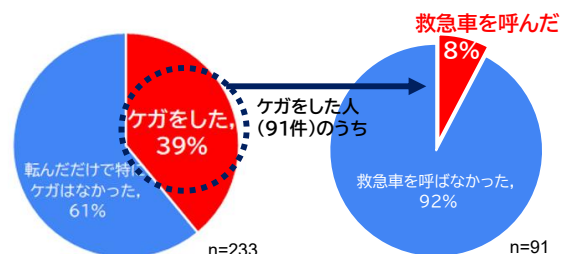


図3 転倒でケガをした人（左）と、そのうち救急車を呼んだ人の割合（右）

3.3 転倒した際のケガの種類と程度

ケガの種類では、「打撲」が最も多く、次いで「骨折」であった（図4）。また、「脳しんとう」では5件のうち、1件が救急車を呼んでいた。ケガの程度では、「病院に行かなかった」は53%で、「通院した」は31%、「入院した（3週間未満）」は10%であった（図5）。いずれも、令和6年度の調査結果とほぼ同じ傾向がみられた。

また、「打撲のみ」や「切り傷」「挫創」などの場合は、ほとんどの人が病院には行っていなかつ

た。「骨折」や「捻挫」の場合は、一度は病院に行っている人が多くみられた。

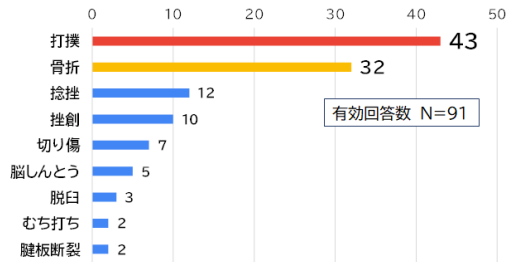


図4 転倒時のケガの種類（複数回答可）

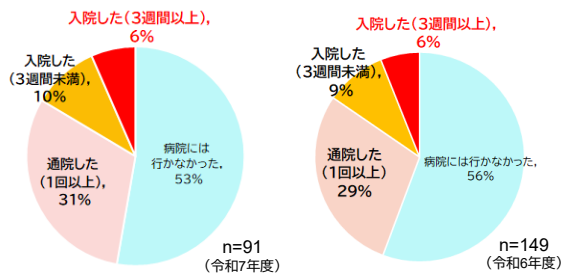


図5 転倒時のケガの程度
(左：R7年度，右：R6年度)

3. 4 ケガによる仕事等の休暇の有無と日数

ケガにより仕事や家事，学校等を「休んだ」は32%であった(図6・左)。「休んだ」人の日数では，「1か月以上」が38%で最も多く，「1週間～1か月未満」は21%であった(図6・右)。また，「1か月以上」休んだ人の約8割の人が，「入院した」との回答で，ケガの種類は「骨折」が多くみられた。全体の約6割の人が1週間以上休んでおり，普段の生活への影響が大きいことが示唆された。

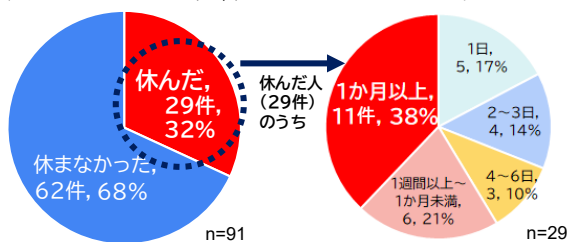


図6 ケガによる仕事・学校・家事等の休みの有無(左)と，休んだ日数(右)

3. 5 転倒して治療にかかった費用

転倒してケガをした際に治療にかかった費用(薬や湿布などの物品の購入も含む)は，「特に費用はかかっていない」が42%で最も多く，次いで「1万円～5万円未満」の17%であった(図7)。少しでも費用がかかっている人は全体の約5割で，「20万円以上」は6%で5件であった。

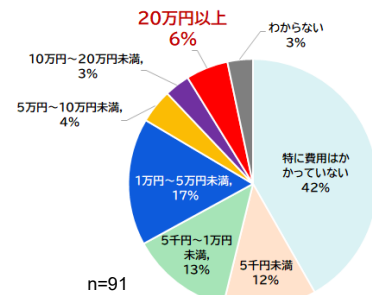


図7 転倒して治療にかかった金額

3. 6 転倒時の路面への意識や歩き方，自身で思い当たる転倒の原因

路面の滑りに対する意識では，「滑ると思って注意していた人」は61%(令和6年度は58%)で，全体の約6割の人が注意して歩いている(図8)。そのうち，「ケガをした」人は約4割であった。また，転倒時の行動には，「足元(路面)を見ていなかった」や「急いでいた」，「片手(両手)に荷物を持っていた」が多く，過年度の結果とほぼ同じ傾向が見られた。

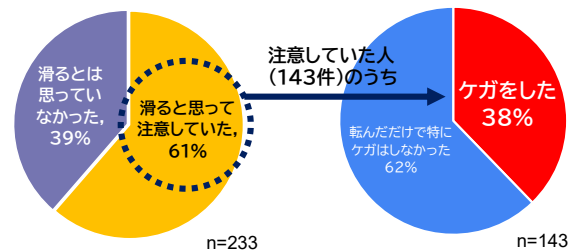


図8 転倒した際の路面の滑りに対する意識(左)と，そのうちケガをした人の割合(右)

転倒した際の歩き方では，「雪道にあった歩き方を意識して歩いていた」は61%(令和6年度は53%)であった(図9)。自由記述では，「脚をあまり上げすぎないように」「小幅で，ゆっくり」「すり足」など，協議会で推奨している歩き方のコツと同様の内容が多くあったが，歩き方を意識していても転倒している人が多くいた。

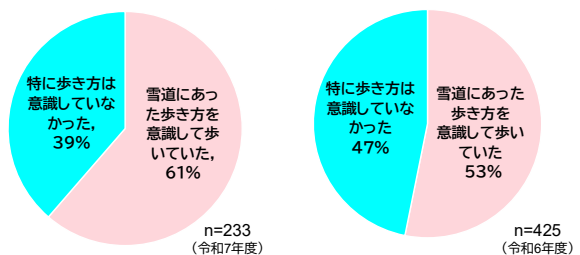


図9 転倒時の歩き方の意識
(令和7年度と令和6年度)

自身で思い当たる転倒の原因では、「不可抗力」が最も多く、次いで「滑るとは思っていなかった」「注意が散漫になっていた」であった。また、「不可抗力」と回答した人のうち、路面状況では、「とてもツルツルだった」は47件、「雪の下にツルツルが隠れていて見えなかった」は30件であった。十分注意していても、滑る路面があった場合には転倒してしまうことがうかがえた。

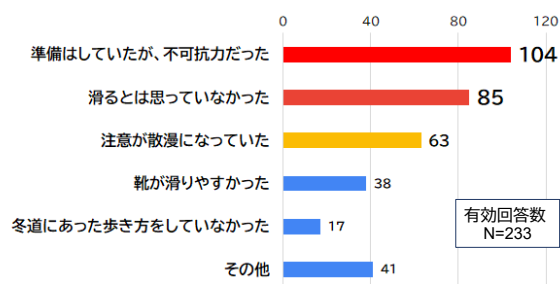


図10 思い当たる転倒の原因（複数回答可）

3. 7 転倒時の服装や装備

転倒した際に身に着けていた装備では、「滑らない靴を履いていた」が153件、「手袋をしていた」は149件で、いずれも6割以上の人が身に着けており、次いで「リュックサックを背負っていた」が101件であった。

協議会では、冬道転倒時のケガを少しでも軽減させるための基本の冬装備として、滑らない靴と合わせ、「帽子・手袋・リュック」の3点を推奨している。これらを全て身に着けていた場合と全く身に着けていなかった場合を比較した（図11）。冬装備を全く身に着けていない人は、全て身に着けている人と比べて、ケガをして「救急車を呼んだ」割合が1.75倍であった。滑りにくい靴とあわせて基本冬装備の推奨3点セットは転倒時のケガの軽減に寄与していると考えられる。

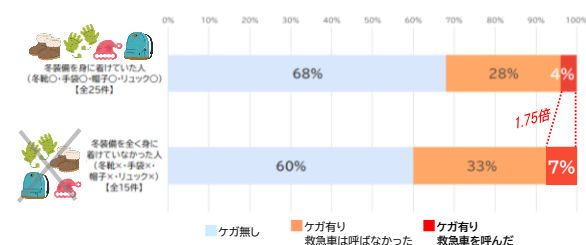


図11 基本冬装備を身に着けていた場合と全く身に着けていなかった場合のケガの割合

4. まとめ

転倒実態把握に関する調査は本年度で試行を含めて4回目となるが、過年度と同様の設問では、各項目ともほぼ同様の傾向が確認された。また、本調査結果は、協議会がこれまで発信してきた転倒防止に関する情報とも概ね一致しており、情報発信内容の妥当性を裏付ける結果となった。

今年度新たに追加した休暇取得や治療費に関する設問では、転倒による影響は身体的なダメージだけでなく、仕事や日常生活への影響、さらには医療費などの経済的負担にも及ぶことが明らかとなった。転倒事故を未然に防ぐことは、自身の健康だけでなく、生活や社会的損失を軽減することにもつながる。引き続き調査を継続し、データの蓄積と検証を進めていきたい。

今後は、本調査結果を踏まえ、転倒による様々なリスクをより身近な問題として理解してもらえよう。対象者の属性や転倒実態に応じた効果的な情報発信を行うとともに、協議会サイトやパンフレット等の内容についても継続的な改善を図り、冬道転倒事故の防止につなげていきたい。

【謝辞】

本調査の実施にあたり、ウインターライフ推進協議会の皆様ならびに本アンケート調査への回答のご協力をいただきました皆様に、心より感謝御礼申し上げます。

【参考文献】

- 1) ウインターライフ推進協議会、「転ばないコツおしえます。」、<https://tsurutsuru.jp/> (2026.06.29.閲覧)。
- 2) 高野伸栄, 戸部啓太郎, 金田安弘 (2015): 札幌市における冬期歩行者転倒事故実態について, 寒地技術シンポジウム, **31**, 124-127.
- 3) Marjo Hippie (2012): Born Slippery, An pavement model predicts iciness. Meteorological, Technology International, 70-71.
- 4) 富田真未, 金田安弘, 永田泰浩 (2025): 冬道での転倒者を対象としたアンケート調査-2024年度冬期調査報告-, 北海道の雪氷, **44**, 23-24.